

# 可美都氣努麻具波思麻度尔

渡 部 和 雄

東歌、三四〇七に、

可美都氣努 麻具波思麻度尔 安佐日左指 麻伎良波之母奈 安利都追見礼婆  
という歌がある。古来「麻具波思麻度」が難解である。

『注釈』―仙覚抄に「マクハシマドトハ、マドヨリ、アサヒノサシイリテ、モノ、イロノクハシクミユレバ、マクハシ  
マドトイヘリ」とある。「ま妙し窓」としたのであるが、上毛野につづけては考に「眞桑島てふ川島など有て、其潮  
瀬を門（ト）といふならん」という説が多く行はれている。

古典大系本には「シマドは島津の転か、清水（シミズ）の転か。」

とあつて、結局は地（名）のようにとり、口訳はへ上つ毛野 まぐは島門にとのようになってゐる。

『全釈』——地名と見るべきもののやうである。

『角川文庫 万葉集』には、

「まぐは（地名）島門」が本義か。編者は「目妙し窓」の意に解したらしい。

『全訳注』に、

上野まぐはし円に朝日さしまぎらはしもありつつ見れば

真妙し。円の形容。円は所在不明、円方、円野らと同じく、わん曲した地形という地名。

という。

『全注』

地名を含むようにも考えられる。

真桑という地の島門（大系など）

真桑と言う地の川島の門・渡瀬（考など）

真桑清水（シマドはシミズの転呼か。真桑は今の前橋市桑町がその名残か）（論究）などあつて定め難いが、一応地名——真桑島門——と解しておく。

とある。

「窓」という言葉・用字もないわけではない。

二六七九 窓超尔 月臨照而

窓越しに月おし照りてあしひきのあらし吹く夜は君をしぞ思ふ

月の光は窓を越して内側に入っている。『仙覚抄』はそれに依つたのか、「マドヨリ、アサヒノサシイリテ」と内側

の様子を言っている。

さて、勤めている学校に清水先生、杉戸先生がおられて、その呼び声が、東国に育った私には同じ様に聞こえる。そこではアクセントなどというものには生涯会わず、言葉は音より状況によって判断する。

## 二

以上の諸注釈からみても、上毛野十「麻具波思麻度」の關係は地名の性質が考えられるところがあるだろう。

三四〇四 上毛野—安蘇の真麻群

三四〇五 上毛野—乎度の多杼里

小野の多杼里

三四〇六 上毛野—佐野の莖立

三四一二 上毛野—久路保の嶺ろ

三五一五 上毛野—伊香保の沼

三四一七 上毛野—伊奈良の沼

三四一八 上毛野—佐野田の苗

三四二〇 上毛野—佐野の船橋

三四二三 上毛野—伊香保の嶺ろ

三四三四 上毛野—安蘇山つづら

三四二四 下毛野―三疊の山

三四二五 下毛野―安蘇の河原

と並べてみると、一応は「上毛野麻具波思麻度」は地名（場所）のように把握されていたのではないかと考えられる。

もつとも「久路保」にしろ、「伊香保」にしろ、 $\langle$ 黒ほ $\rangle$   $\langle$ 厳ほ $\rangle$ の如くとれば、固有名詞以前の状態を指していたこともあるだろうから、「麻具波思麻度」を普通名詞の段階においてみることも可能であろう。

さて、先の諸注釈にみたのでも判るように、「マグハシマド」を「マクハ―シマド」に分けると、「マグハシーマド」に分けるのに大別され、それによつても解釈が違ってくる。

三四二四 之母都家野 美可母乃夜麻能 許奈良能須 麻具波思児呂波 多賀家可母多牟は、「児ろは」を修飾しているらしく、「マグハシー児ろは」であっても良いだろう。

「クハシー妙・細」の語があるので、「マ」は本来接頭語で、「ま妙し」といった形容詞シク活用というわけであろう。対して「マクハ―シマド」は異質だから「真桑―島門・島津」という風に、普通名詞を含んだ地名ということになるのだろう。

### 三

「マグハシマド」を接頭語―場所（名詞）―地名の形として考察する。

三五四六 青柳の張らる川門に汝を待つと西美度波久未受立処平らすも

の「西美度（セミド）」は「清水」の訛り、と一般には考えられている。

「清水」は、

一五八 山振之立儀足山清水酌尔雖行道之白鳴

五二 御井之清水

などに見えるが、東歌のそれは、

『万葉集東歌・防人歌』には、

訛りとするよりは東国特有の語とすべきか。

という。正誤はとにかく、文学的にはこういう捉え方のほうが良い。

東歌では「川の流れ」と同一のものを指していることになってしまいが、とすると清水（あるいは泉）の流れ出た川なのかも知れない。この川を清水（泉）川（河）という。

五二の「御井之清水」は新編日本古典文学全集では「きよみづ」と訓まれている。

先の同全集では「すみみづ」であった。

角川文庫（伊藤氏）は「ましみづ」。全訳注（中西氏）は「しみづ」である。

神代紀下 私紀乙本

門前有一好井 〈好井志美津〉

和妙抄

日本紀私紀云 妙美井、之三豆

などによるとシミツは「好井」〈妙美井〉という風に、いわば風雅に捉えられている。

琴歌譜

高橋の甕井の須美豆

ところで、卷十六、

三八七五 琴酒を押垂小野ゆ出づる水ぬるくは出でず寒水の心もけやに思ほゆる音の少き道に逢はぬかも少きよ道に逢はさば……少き道に逢はぬかも

『万葉集』（桜楓社）では「しみづ」

『全訳注』「しみづ」

『注釈』『万葉集（塙）』『角川文庫』などは「さむみづ」と訓んでいる。

「ぬるく」に対して「寒水」だから、「さむし」はアンバランスにも思われるが、「寒田」というような例はある。

（香島郡）郡南甘里濱里。以東松山之中。有一大沼。謂寒田。可四五里。鯉鮒住之。沼水流漑野田二里許。……

称那賀寒田之郎子。は「さむ田」「さむ田のいらつこ」と訓まれている。ヘシミズ田という言葉はままある。

右の「出づる水」や「大沼」が泉であったのかどうかは分からないが、「寒水」の表現がそれらしい推測をさせよう。

『角川文庫』では、「ここまで序」として、「心もけやに思ほゆる音の少なき」を「心にひやりと応える人声」としている。そして、

そんな人声の少ない道で、以下、女の立場で応じる。

という型をいつている。

『全訳注』は大分違っていて、

琴や酒をたずさえてゆく小野を流れ出る水のように生ぬるいのではなくて、清水のように心も清々しく思われる、

人に知られる心配のない道で逢いたいな。

という。へ心も清々しく思われる―人に知られる心配のない道―がはっきりしないが、「寒水」（湧水・清水）は「音の少なき」にかかるのではないか。「音の少なき」（人音のしない）、「道に逢はぬかも」「少なきよ」「道に逢はさば」（という尊敬表現）、「少き道に逢はぬかも」は東歌の世界を示す。

三五四六 青柳の萌らる川門に汝を待つと清水（せみど）は汲まず立ち処平すとも

三四〇五 上つ毛野乎度の多杼里が川道にも子らは逢はなもひとりのみして

或本 上つ毛野小野の多杼里があはぢにも背なは逢はなも見る人なしに

とあげてみると先の三八七五の歌の背景とそっくりになる。そして三四〇五と或本は男女の対応になっている。

後藤利雄氏に「せみどは清水の東国方言にあらざるべし」という論考がある。

第一の理由としては、「川水」を「清水」と称するところがないことである。上代の東国の川水は、なるほど汚染されない綺麗な水であったであろう。しかし大雨が降れば上代と雖も、川の水は濁ったはずである。その点、平均的にはどんな綺麗な水であるにしても泉の水とは区別があるものと見なければならぬ。

第二の理由は、逆に「しみづ」という語で、川の水を呼ぶことがなかったことである。歴史的にそうだっただけでなく、現代の方言を見ても、そのことは変りがない。

と言われている。このことは多分重要なことであるが、実際的には泉の流れが川になっている所はいくらもあって、そこに、洗い場、水汲み場が出来ている。私の生れた部落には「清水川」という川があって、これは「清水」と「川」が一体化している。

古い所で直接的な関係を捉えているわけではないが、歌には次のような詠み方がある。

新古今 二六二 みちのべにしみづながるる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ

玄玉 一〇一 道のべの清水ながるる柳陰しばしとてこそたちとまりけれ

ば同じ歌なのであろうが、清水が流れて、ほんとに柳が立っていた。

夫木 三六六八 日をさふる夕山杉の木の下に清水流れて夏ぞすくなき

などは後藤氏風には川水のきれいな、流れということになる。

右様の歌の流れからは、

新古今 九九六 みかのはらわきてながるるいづみ川いつみきとてかこひしかるらむ  
にまで至る。へいづみ川は、

万葉集 一〇五四 泉川行く瀬の水の……

というそれであらう。藤原宮役民の歌に、

五〇 新代と泉の川に

とある。木津川と注される。

万葉集の「いづみがは」は、

いづみかは

三九五七 清き川原に

一〇五四 ゆく瀬の水の

三三一五 渡瀬深み

一〇五八 渡りを遠み



いづみのかはに

五〇 持ち越せる

いづみのかはの

三九〇七 上つ瀬に

三二四〇 速き瀬を

三九〇八 水脈絶えず

のように存在するが、清水（川）ではない。

で、一応「いづみ（川）」は除くとして、清水（川）が地名であることはいうまでもないほどである。水の性質を含んでいるのだけでも、清水（村、町） 清水今江、清水河岸 清水港 清水沢 清水尻 清水新田 清水瀬 清水谷 ……大げさに言ってみると枚挙にいとまがないくらいである。

一方、風土記関係では、

『筑波誌』

女男川 女体山の頂上より南の方に僅か下れば、岩石の間より、清泉湧出す、風土記に曰く、……とあるは、此清水を指したるものなり、西南に流下して女男川となる。一説に湧出する清泉真砂の下をくぐりて、川とも見えず一滴づ、流れて、末は河となる故水無川みなと名付しものなり、道を隔て、数尋の谷に落つ、此処を恋が瀬といふ、男体山より湧出する橘井の清泉は、流下して此瀬の流水に合し、山麓を過ぎて桜川に入る。

という「此清水」（清泉）は、

夫筑波岳。……其側流泉。冬夏不絶。自阪以东諸国男女。春花開時。秋葉黄節。……の「流泉」のことである。泉

・井（池のようなもの）を用水にしたことは、

一八〇八 勝鹿の真間の井見れば立ち平し水汲ましけむ手児名し思ほゆ  
もう一首、試みにあげてみる。

三二六〇 小沼田之（一般には、元・天・類によって「小沼田之」年魚道之水平間無曾人者汲云時自久曾人者飲云……  
「ヲハリダノ」は集中二六四四「小墾田之」の例があって、「小沼田之」は他にない。

小沼田の（小沼田の）年魚道の水を間無くそ人は汲むといふ時じくそ人は飲むと云ふ というのは、湧き水の出ている田（清水田）、小さな沼をなしている、田の部分であるが田としては使用しない所、へ沼田」という地名がある。

そこから流れ出しているのが清水川、それは大きな川や海に注いでいる。大きな川や海から「年魚」が清水川を登って、小沼田に泳ぎつく。それが「年魚道之水」なのではないか。年魚の通う川水、「を間無くそ人は汲むといふ時じくそ人は飲むといふ」のではないか。

「年魚」という表記はへ鮎の意味として使われているのではないか。で、

二七一 桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし鶴鳴き渡る

一一六三 年魚市潟潮干にけらし知多の浦に朝漕ぐ舟も沖に寄る見ゆ

の、「アユチ」とよまれている「年魚市潟」に関係づけてみれば、そこは「年魚道之水」（あゆち川）が流れ込んでいる海辺ということになるだろう。「桜田」というのは、先の「小沼田」（小沼田）の方角にある。

鮎の泳ぐ川の水を汲んだり飲んだりしたことは、

八五九 春されば我家の里の川門には鮎子さ走る君待ちがてに

によって考えられ、「浦」で鮎を釣ったのは、

八六三 松浦川玉島の浦に若鮎釣る妹らを見らむ人の羨しさとよつて考えられる。

あるいは静岡県清水市の神田川は東洋一の湧水量の「清水・湧水」川だという。

#### 四

さて「マグハ清水」（接頭語十地名）として「マークハ清水」。「クハシミズ」は「コハシミズ」（強清水）ではないか。

『日本国語大辞典』

こわしみず こはしみず 「強清水」

泉に関する伝説の一つ。薪を取りに行く翁が毎日酔って帰るので、ある日あとをつけて行くと、山中の清水を飲んで酔っている。飲んでみるとただの水だったという筋で、各地の霊泉に類話がある。

柳田国男の「南の国の清水」に、

本州諸国の強清水といふ泉に、しばしば「親は諸白子は清水」の話を伝えるのとよく似ているが……とある。

万葉集で

「コハ十名詞」の形で「コハ」を微妙に形容、修飾に使っている例はないが、二四二五 山科強田山（木幡の山）とあつた「強」は「コハ」とよまれている。

『綜合日本民俗語彙』

コワシミズ 強清水。福島県西白河郡小田川村にある。(内容はほぼ先に同じ)  
北会津にも同じ伝説があり、これを強清水といっている。この地名は各地にあり、口碑もほとんど同種のものである。

以下地名をあげると

宮城県伊具郡筆南村吉田

千葉県山武郡土気本郷町大和田

千葉県印旛郡大竹村

同印旛村吉岡

新潟県古志郡栖吉村

長野県南佐久郡田口村

石川県鳳至郡櫛比村

『地名辞典』

こわしみず 強清水 青森 福島 新潟

こわしみずしんでんむら 強清水新田村 福島

こわしみずのごう 強清水郷 茨城

こわしみずむら 強清水村 福島

こわししょうず 小和清水 福井

(福井では湧水の用水場をショウズというのであろう。ここもコハシミズではないか)

また「コウシミズ」もあつたらしい。

コウシミズ

新潟県新津市に「幸清水」といわれている所があつて、文化財に指定されている。

もつとも、以上「ヘマ+コハ+シミズ」といつてきたが、それなら「ヘマ+くはし(妙し)+ミズ」でもいいかも知れない。

三四二四 之母都家野美可母乃夜麻能許奈良能須麻具波思児呂波多賀家可母多牟とあつて、「まぐはし—児ろ」と訓まれている。さすれば「ヘマ妙し—水」である。

「清水」「井」は汲むものであつた。

山清水—汲みに

井上(井辺)—水を汲まむとする時に

四一四三 もののふの八十娘子らが汲み乱ふ寺井の上の堅香子の花などと詠まれている。

流れている井は、出雲国、上淀庵寺近くに、「天の真名井」があつて、川になっている。

更に遠く、

「エテンでは一つの川が湧き出し、この園を潤してゐた。それは、そこから先で四本の支流に分かれていた。

第一の川の名はピションであり、……

第二の川の名はギホンであり、……

第三の川の名はヒデケルであり、……

第四の川はユーフラテスである。”

(旧約・原初史)

フランスにはアベンヌの温泉水というのがあって、美容などに利用されているが、この温泉は大きな流れになっている。

川は汲む人がいなくなり、洗う人がいなくなり、水浴びする人がいなくなり、棲む魚もいなくなると、川の性質をなくしてしまう。

川が人間の生活と殆ど一体であった時と、現在とでは、言葉、文学の性質が全く違う。二十世紀後半から人はおかしくなってきた。

これは少しおかしい物語なのであるが、

“タンタジェルの城のうしろには……一本の松の木がすくと聳え……松の根元には清水の湧く泉水があつて……狭い兩岸にはさまれて園生を流れ、城の内部にはいつて、婦人部屋の間を流れていた。

トリスタンは夜ともなれば……樹皮や木片を器用に削るのであつた。……それを松の木の下にゆくと、流れの中に投げ入れる。すると、それは水洑のように軽いので、水面にうかんでは泡にまじつて流れてゆく。部屋の中ではイズーがじつとそれをまちうけて……彼女はただちに恋人のほうに馳せてゆくのであつた。”

加工される場合もある。安蘇の轟泉水道、宇土藩の上水道として利用された。

さて

三四〇七 麻具波思麻度尔（ま強清水に）

の「麻」をいゆる接頭語という風に考えると、似た型に、

三四六四 麻乎其母能（ま小薦の）

三五二四 麻乎其母能

などがあると思われる。

三四〇〇 安蘇能麻素武良

三五五二 麻比等其等

などは一般的な例である。

防人歌でも、

四三六八 麻可知之自奴伎

四三四二 麻気波之良

四四一四 麻可奈之伎

四三八八 麻多妣

四四二七 麻由須比

など「マ」がみられ、「マカナシミ」という表現もある。三三五八、三三六六「麻可奈思美」は四四一四「マカナシキ」に通う。

## 五

「アサヒサシ（安佐日左指）」は、

一八四四 朝鳥指 朝日さす春日の山に

三〇四二 朝日指 朝日さす春日の小野に

四〇〇三 阿佐比左之 朝日さし背向に見ゆる

などに見える。「朝日照る」という云い方もあった。

一七七 朝日照る佐田の岡辺

一八九 朝日照る島の御門

「朝日がさして」眩（マブ）しいといういい方はない。

もし「朝日がさして」キラキラと「眩しい」という文脈であれば、それはガラスのようなものが対象となっているだろう。

清水（泉）の湧き出た所は円い沼状になっている。真中から湧水して盛り上り、波紋の外周が円いわけである。その沼状の水鏡に朝日の光がさせば、眩らはしもなの文脈は多分、一番よく成立するだろう。水鏡は揺れている。

「朝日指し」は「太陽の光」とも少し違っている。「ひかり」は穏やかで暗さを伴っている。

四〇八六 安夫良火乃 比可里尔見由流

四〇八七 等毛之火能 比可里尔見由流

は縵だったりさ百合だったりしている。

二九〇 出来月乃 光乏寸

一〇七五 月読 明少 夜者更下午



は月の光である。

六七〇 月読之 光二来益

三一六九 射去火之 光尔伊往

六七一 月読之 光者清

月の光 漁火の光 すべて夜の光である。

三一七 照月乃 光毛不見

三五九九 月余美能 比可里乎伎欲美

三六二二 月余美乃 比可里乎伎欲美

三九二二 布流雪乃 比加里乎見礼姿

三九二六 比賀流麻泥 零流白雪

は珍しく、雪のひかりである。

四二三六 光神 鳴波多憾婦

の一例はとにかく、へひかりゝは、眩しく照り返す様相を示さない。

「光神」が天照大神や太陽神になることはない。前の、

四二三五 天雲乎富呂尔布美安太之鳴神毛

から見れば「光神」は「鳴」を修飾しているのであらう。「ハタ娘子」は女への修飾。

バアルのように、電光、雷鳴、冬の雨と言った働きもみられない。また最後の審判の、「その王座から電光と雷と声  
とが発した」

とのようなイメージにもならなかった。

「光」を「てる」と訓む例がある。

三八八六 天光夜 日乃異尔干

忍光八（忍照八）難波乃小江乃

は対になっているから、天に照っていると、海面が照って（光って）いる関係なのだろう。

柿本人麿が「天照日女之命」（二云 指上日女之命）と表現している。これが太陽神、豊饒女神の性質をちらりと見せているが、この「日女之命」はイシュタルにもアスタルテにもヴィナスにもマリアにもならなかった。

「まきはし」

『時代別国語大辞典』（上代）に「まぶしい」。

キラハシは、霞む意の動詞キルに動詞語尾

フの接したキラフからの派生か。

マは接頭語か、目の意か不明。

とある。

「まきゆ」未詳。目がくらむの意か。

由是長髓彦軍卒皆迷眩マトヒマキユ 不復力戦（神武前）ともある。

「迷眩」末支江氏、万止布天（日本紀私記）

一方「マガラハシ」は「紛はし」に流れて行く伝統を示しているから、東歌の「麻伎良波之母奈」を「キラキラしてまぶしい」という風な形容詞らしいという前提で、一首を解釈するのも気がひける。

二七五七 大君の御笠に縫へる有間菅ありつつ見れど事無吾妹

の「コトナシ」は醍醐寺本『遊仙窟』『好、コトムナシ』、『名義抄』『美、コトモナシ』などによって、美、好の性質に解される。

透明というへ意味であるものゝは、支配秩序につながるように存在している。

農耕的生活共同体にはこんな透明（な意味）は存在しない。そこは非秩序、混沌だけである。そこからの他界のように意味がある。

具体的には律令国家の使者、地方官につながってだけ、意味というものが成立する。

だから、意味などを保持できない混乱そのものの中に「へ心」という安定があつたかも知れないのに、この安心は律令政治に向かつて不安となり、存在の一切は制限され、心という本能はこの世から消え失せた。動物や魚のあるものが地上から絶滅したように。

## 六

「ありつつみれば」

「あり」という言葉は理解が難しい。古事記（八千矛神の歌）に、

佐用婆比述 阿理多々斯

用婆比述 阿理加用婆勢

とある。求婚の儀礼歌に用いられている。

万葉集では「ありつつも」という表出の方がずっと多い。

安里都追毛 三三六〇

安里都〃母 四三〇二

安里都〃毛 三四二八

在管裳 三二四

在管裳 八七

在乍文 二六七一

在乍毛 二二六三

在乍毛 五二九

有都〃毛 四二二八

有乍 一二九一

有乍毛 二二〇〇

「ありつつみれど」

有管雖看 二七五七

「ありつつみれば」

安利都追見礼婆 三四〇七

在筒見者 二二八八

とみてくると「ありつつ」という言葉は割合好まれた言葉らしい。

東歌に、

三三六〇 伊豆の海に立つ白波のありつつも継ぎなむものを乱れしめめや

或本歌曰 白雲の絶えつつも継がむと思へや乱れそめけむ

三四二八 安太多良の嶺に臥す鹿猪のありつつも吾は到らむ寝処な去りそねとある。

防人歌には「ありつつ」の表現がない。作歌の前提にその環境がなかったのであろう。「ありつつ」は自己に関わる状態、心況を示しているのが一般である。

「ありつつも――継ぎなむ」

「ありつつも――吾は到らむ」

であって、意欲を秘め、行動を窺う状態をいつている。

二二八八 石橋の間々に生ひたる貌花の花にしありけり在簡見者

の「ありつつみれば」にしても意欲的に窺っていたから一首に成立してきたのであろう。

「ありつつも」が最初に出てくるのは、

八七 ありつつも君をば待たむ打ち摩くわが黒髪に霜の置くまでに

或本歌曰 居明して君をば待たむぬばたまのわが黒髪に霜はふるとも

右一首古歌集中出

である。

八七の「ありつつも」と或本歌の「居明して」を対照してみると「居明して」の方が具体的であって、放散度は「あ

りつつも」の方が強い。

卷三、三三四 ……絶ゆることなくありつつも止まず通はむ……

は山部赤人。「明日香の旧き京都は」とあって、奈良から明日香へ行ったのであるが、その時期ははっきりしない。

卷四、五二九 佐保河の岸のつかさの柴な刈りそねありつつも春し来らば立ち隠るがねは  
大伴坂上郎女の歌。

山部赤人は作歌年代は、

神亀元（七二四）十月紀伊行幸従駕歌

同二（七二五）五月吉野行幸従駕歌

同十月難波行幸従駕歌

同三年（七二六）印南野行幸従駕歌

天平八年六月（七三六）吉野行幸従駕歌

である。

大伴坂上郎女のは、

天平二（七三〇）十一月太宰府より帰京。である。

これで「ありつつも」は一応八世紀前半の言葉であるように推測され、八七もその頃に作られたもののように推測されるが、

一二九一 此岡草茹小子勿然茹有乍公来座御馬草為

右廿三首、柿本朝臣人麿之謄集出

の「有乍」は「ありつつも」と訓まれ、旋頭歌である。坂上郎女の五二九に似た内面性が感じられる。坂上郎女は右

の人麿調集の歌を読んでいたのではないか。

人麿歌集は巻十一（二三五一―二三六二）にもあつて、続いて古歌集五首がある。

二三六三 岡の崎廻みたる道を人な通ひそ在乍毛君が来まさむ避道にせむ

という感じはやはり似ている。同巻十一には

二六七一 今夜の有明の月夜在乍文君をおきては待つ人も無し

二七五五 大君の御笠に縫へる有間菅有管雖看事なき吾妹

とある。

人麿歌集―古歌集―巻十一の世界に「ありつつも」があつて、その巻十一で、旋頭歌から自立して短歌の世界に入つてきた。

「ありつつみれど」東歌の用法に似ているが、巻十には、

二二八八 石橋の間々に生ひたる貌花の花にしありけり在筒見者

二三〇〇 九月の有明の月夜有乍毛君が来まさばわれ恋ひめやも

とあつて「ありつつみれば」が出てくる。

この巻十、十一、十二、また人麿歌集は東歌に關係ある歌卷であると推測されて、

三四一七 上毛野伊奈良の沼の大る草よそに見しよはいまこそ勝れ

柿本朝臣人麿歌集出也

三四四一 ま遠くの雲居に見ゆる妹が家にいつか到らむ歩め吾が駒

柿本朝臣人麿歌集曰 等保久之豆 又曰 安由売久路古麻

三四七〇 相見ては千年や往ぬる否をかも吾や然思ふ君待ちがてに

柿本朝臣人麿歌集出也

三四八一 あり衣のさゑさゑしづみ家の妹に物言はず来にて思い苦しも

柿本朝臣人麿歌集中出 見上已訖也

三四九〇 梓弓末は寄り寝む現在こそ人目を多み汝を間に置けれ

柿本朝臣人麿歌集出也

などの様相がみられる。「イナヲカモ」は人麿歌集―卷十一(二五三九)―東歌にある。

そこに東歌の「ありつつも」が比較的大量に出現するわけである。

三三六〇 伊豆の海に立つ白波のありつつも継ぎなむものを乱れしめめや

三四〇七 上野のまぐはしまどに朝日さしまぎらはしもなありつつ見れば

三四二八 安太多良の嶺に臥すししのありつつも吾は到らむ寝処な去りそね

の「ありつつみれば」↓まぎらはしもな、も活動へ向けての意欲的状况であると読みとつてもいいのかも知れない。

対象を期待していた目で見つめること。そうすると「まぎらはしい」というわけである。

「ありつつ見れば」↓花にしありけり

に似ている形。いや、そうしてみると二二八八「かほ花の花にしありけりありつつ見れば」は「かお花のように実のないあだ花だった」(全集)というよりは、へかお花のように美しい花とでもなりそうでもある。東歌(三五〇五)「うちひさつ宮の瀬川のかほ花の恋ひてか寝らむ昨夜も今夜も」とある。

この歌、一般には上三句序と解釈されているが、「かほ花」は美しい女を指して「かほ花二」と、本来は対象性を含



んでいるのではないか。本来対象性であるものが、比喩的序句「……の」となるのが東歌にはあるように思われる。  
三三七〇 足柄の箱根の嶺ろのにこ草の花つ妻なれや紐解かず寝む

も上三句序、「にこ草のような花妻」と読解されているが、こんな所も散文的には、「にこ草二」寝る、だから「花妻」なのではないか。萩に臥す故に鹿は「花妻」であるという風に。

さて「ありつつ見れば」――まぎらはしもな、はずつと期待していて、いまそれに会った表現、相手が人間であれば挨拶言葉で讃め言葉であろう。活動への飛躍も含まれている。としたら「まぎらはしもな」は相手の輝くような、「うちひさつ」美しさを云っている。

「ありつつ」という、まとまった情趣表現は古事記にはない。古語辞典類にも「ありつつ」という項目はみられない。

ふとしたら「ありつつも」といった文学用語がありえたのかも知れない。万葉集ではこの表現にある種の「情趣」を持たせてあるのかも知れない。

そう云えば「ありつつ・も」「ありつつ見れば（ど）」は散文、歴史記述用語にはならないだろう。

いわば「ありつつ……」を使用することによって、その場を生活と歴史の場から異次元の環境にかえるのである。

それは政治、官吏に備えられた酒宴の場にはほびとしかった。

彼らは赴任、都から下向の際に送別の宴を持っていたし、国府に到着した時にも歓迎の宴を持っていた。帰京にも同様にしなければならない。それが政治と支配の内質をなしていたから。その政治・支配に適するように儀礼の歌が披露されるのであろう。

「ありつつ」は次第に「君が来る」「君を待つ」風に傾斜した趣を見せる。例えば、

三三六〇 伊豆の海に立つ白波のありつつも

だったら、へ君が来るのを待ちつづけて」といったような情緒を含み、

三四二八 嶺に伏すししのありつつも

だったら、本来的なへ在りつつへと伴行してへあなたの来るのを待っていないながらへの内情があつてもよいように思われる。

「ありつつ見れば」は着任を待っていたという表現なのだろう。

歌の音調が地方官という政治性を緩和し、酒宴という反言語性をカバーするのだろう。

それにしても歌という音調言語が国家的政治・支配の中に取り込まれ、うまく収まった様相は、湿润な日本文学の情緒を作ったが、詩や歌の超越的言語の性質を保持・自立をはばんでしまったのであろう。

「まぎらはしもな—ありつつを見れば」は〈君〉である存在に対する挨拶の賛辞。

二三五二 玉のごと照りたる——君

という表現もある。

七

上野 真強清水

地名に 朝日さし まきはし 場所、連用修飾句、形容詞

景物に

まきはらしもな　ありつつ見れば

の「ありつつ見れば」で「まきはし」が人事に転換する。上位の者、君、地方官などへの、地方人からの挨拶であ

ろう。

二二八八 石橋の間々に生ひたる貌花の花にしありけりありつつ見れば

は、先にも挙げた卷十の歌である。「カホ花」は「あだ花」「空しい花」のように、負性に解されているが、東歌では、

三五〇五 うち日さつ美夜能瀬川の貌花の恋ひてか寝らむ昨夜も今宵も

とあつて必ずしも否定性を持つわけでもない。「カホ花」は美しい顔のイメージを持つのではないか。でなければ「恋ひてか寝らむ」はとるまい。

「カホ花の花にしありけり」も、期待して会った女（ありつつ見れば）に対しての挨拶、ほめ言葉ではないか。また、参考にされる、

二二二六 秋萩は雁に逢はじと云へればか声を聞きては花に散りぬる

の「花に散りぬる」は少し違うのではないか。

訛音のある歌というのは地方官に対する現地人の挨拶のようで、滑稽でありつつ悲壮味を持っている。

泉や清水川は古代村落では豊饒性だったり、神の住居だったりしたろうに、国家的秩序の中では官僚への挨拶の序となつてしまふ。